

ハイライト「水俣・福岡展協賛企画映像セミナー 水俣から人間環境の未来を学ぶ」

すべてのプログラムについて詳細に書くことはできないので、5回のうち最も大きなイベントとなった第2回目のイベントについて書くことにしよう。

本映像セミナーは福岡西部地区五大学連携講座の一環として、また九州大学 P&P に採用された「フィールド人間環境学プログラムへの基礎的研究」(代表:飯嶋秀治)の公開会議として、さらに人間環境学府多分野連携プログラムの一部として、NHK 福岡放送局と九州大学の共催という形をとって行われた。プログラム及び参加者は下記のとおりである。

10時30分～12時00分

「市民たちの水俣病」上映(1997年・RKK・47分) (民放連最優秀賞、ギャラクシー選奨)

トーク「水俣病と市民」

村上雅通(元RKK熊本放送、長崎県立大学)

萬野利恵(原田正純医師の長女)

永野三智(水俣病センター相思社)

司会進行:飯嶋秀治(九州大学)

13時30分～14時45分

九州スペシャル「写真の中の水俣～胎児性患者・6000枚の軌跡～」上映(1991年・NHK・45分) (地方の時代映像祭優秀賞)

トーク「胎児性患者は今」

半永一光(胎児性水俣病患者・「写真の中の水俣」出演)

吉崎 健(NHKプラネット九州支社)

司会進行:飯嶋秀治(九州大学)

15時00分～16時45分

ETV特集「原田正純 水俣 未来への遺産」上映(2012年・NHK・59分)

トーク「“水俣病は鏡”～原田正純が問いかけるもの」

村上雅通(元RKK熊本放送、長崎県立大学)

吉崎 健(NHKプラネット九州支社)

萬野利恵(原田正純医師の長女)

永野三智(水俣病センター相思社)

司会進行:飯嶋秀治(九州大学)

このイベントに関してはその5月10日『毎日新聞』、5月11日RKB毎日放送ニュース、5月12日『毎日新聞』、5月13日『朝日新聞』で紹介された。なので、本プログラムは、対外的にはまずまずの成功を収めたと言ってよからう。

また、以下には当日のアンケートでの回答15件、SNSメディアでのコメント3件、イベント後に岡幸恵の授業履修者から寄せられたコメント18件、最後に飯嶋秀治に個人的に寄せられたコメント4件で延べ40件を掲載する。

1) アンケートでの回答

1	<p>水俣は日本の中でいろいろな意味で希な条例を備えた地域であると感じる。</p> <p>我々にとっては2つの集落を壊滅状態に追いやった大水害の発生した地域であり、この時の土砂流災害は私の目から見ても発生したのは自然現象そのもので、立地に制約がある以上、被害ゼロというのはいないという気がした。</p> <p>災害の際に被害にあいやすいのは、いろいろな意味での弱者であるが、我々は罹災者のステレオタイプ化を厳に憤まなければならないと思う。</p> <p>人間は世界に意味を見つけようとする動物であり、自分の見たいようにしか世界を見ようとしない存在でもある。</p> <p>今日、半永さんを拝見する機会を頂いたのは非常に得がたい体験をさせていただいた。人間というのはよくできたもので、半永さんなどは毒物のせいで、通常の間が持つ能力を持ち合わせていない部分もあるが、逆に平常の間が持ち合わせない鋭い感覚等を備えているのでは、と感じさせられるところがあった。</p> <p>講師紹介の中の永野さんの紹介で、「迷惑をかけない」「自立する」が美德かどうかということ「安心して迷惑をかけあえる社会」ということに共感を覚えた。</p>
2	<p>「市民たちの水俣病」の内容から見られる個々の感情の複雑さは、誰にでも内包していることであり「きっかけ」があれば、吹き出すものでしょう。</p> <p>一番大切な所が複雑さの中でぼやけてすり替っていく流れは、まさに福島の問題と同じですね。</p> <p>永野さんの「もだいかせ(?)」非常に共感を覚えます。</p>
3	<p>2011年飯嶋先生の授業や社会調査を通して、水俣病は海の汚染によって引き起こされた有機水銀中毒ということがわかりました。その後、集中講義で、水俣病のことをもっと深く理解しました。患者たちの苦しさや努力などを感動する時に、たくさんの関心者や支援者の私心のない援助も深く心を打たれました。きょうの映像セミナーで、吉崎健様、萬野理恵様、石牟礼道子様などを、水俣病に、特に患者たちにずっと支援する人達を伺いました心から感謝いたします。</p> <p>水俣病事件は、深い苦難ですが、そこには、さまざまな困難を乗り越え信念を貫く生き方、特に半永一光様、金子雄二様、坂本しのぶ様などの患者たちと支援者、原田正純様の友情は、人を思いやる心や人と人との美しい関係も、日本の国民の間に、確かに存在していると思います。</p> <p>水俣病事件の真実と意味を明らかに解決することは、日本だけではなく、人類の未来にとって重要な意味もあると思います。きょうの映像セミナー、大変勉強になりました。ありがとうございました。</p>
4	<p>飯嶋先生の今期の文化人類学講義を受講している縁で参加させていただきました。名称は耳にしたことのある「人間環境学」が何を指しているのかを体験するというのも主目的です。</p>

	<p>今回受講してみて、水俣地域の問題だけでなく、地方と中央との間の意識的断絶が浮き彫りになりました。水俣病の原因をめぐっての学会における熊大説への圧力や、水俣をなかなか特集しようとしなかったマスコミ上層部が典型例です。ここで、地方中核都市である福岡が、九州代表として東京と地方を橋渡しするのに適任ではないかと思われます。東北の場合、仙台からの発信が重要になってくるのかもしれませんが。</p> <p>結びに、人間環境学への期待・要請として、水俣や福島などの国内外諸地域の問題を学際的に研究することで、教訓を成果物として一般に公表すると共に、風評被害などの社会病・二次災害を社会科学の観点から「防災」できないかを模索することを提言致します。</p>
5	<p>良くも悪くも影響を与えるのがメディアです。客観的な事実を伝え続けて下さい。</p>
6	<p>自分が水俣病について何も知らなかったことを知らされました。カルテの裏側を知る。見てきた方々の生の声を聴くことができたのは大変貴重な時間でした。</p> <p>そして力をもらえました。</p>
7	<p>今まで私は水俣病事件に向き合うことを避けてきたというのがあります。苦しんでいる人がいることは何となく知っていましたが、今の状況を知ろうと行動したこともなく、「終わったことであとは保障の問題」と考えていたと思います。今日この場に來られて本当に良かったです。(個人的なことですが、「中立」ということへの原田正純先生のお考えに、心救われる思いがしました。社会的な力を考えることなしに形式的な中立をとることがどれほど強者の味方になることになるかということに改めて気づかされました。)</p>
8	<p>映像トークしっかり見させていただきました聞かせていただきました。</p> <p>半永君の「生きていること」を知ってほしい思い、原田先生の「出会った者の責任」私も出会った者としての責任を私にできるだけ思いで果たしたいと思います。</p> <p>ありがとうございました。</p>
9	<p>水俣地域の農業振興計画を考えた時期があります。</p> <p>問題の所在は知りながら何もしようとしなかった1960年代の私たちの学び方について、今大いに反省しています。</p> <p>「専門バカ」になるうとして、なりえない人生を送り続けていますが、いい勉強をこの二日間させていただきました。</p> <p>箱崎だからこれだけしか集まらなかったのか、伊都や堅粕・大橋キャンパスならどうだったんだろうか。</p>
10	<p>午後からの参加でしたが、充実した時間でした。</p> <p>私自身何が出来るかと問われれば、おそらく何も出来ずに終わるでしょう。村上さんや吉崎さん、飯嶋さんに期待するところ大です。</p> <p>私は水俣病事件について少し詳しく知り得ただけですが、とても必要なことだと思います。いつかどこかで種がまけるかも...</p>
11	<p>熊本県内の水俣市外の人、水俣病への向き合い方はどういったものだったろうと思いました。熊本市出身の萬野さんのお話の中で、水俣市民にもチツツにも良い印象がなか</p>

	<p>ったという話が心に残りました。その一方で、他県民から見たとき、水俣市民とそれ以外の熊本県民との間に、印象の違いがあったのだらうかと思いました。熊本県民との間に、印象の違いがあったのだらうかと思いました。また、水俣市外の熊本県民の中で、自身も水俣病にかかる(もしくは、かかっている)かもしれないという不安があったのだらうかとも、思いました。</p>
12	<p>とても衝撃的な講演会でした。</p> <p>水俣病というのは自分にとって教科書に載っている公害の1つという認識でした。本当には関係のない話だと思っていました。</p> <p>しかし、今日話を聞いていて感じたことは、水俣病というのはとても複雑な問題だということでした。患者の方々が病気だけでなく、家族、親せき、市民から敬遠されることに苦しめられている話を聞いたときに胸がしめつけられるような思いがしました。</p> <p>自分の居場所がないつらさ、自分をいつわって生きていくつらさというのは自分も経験したことがありました。同じ悩みをもっているということを知って、とても近くに感じることができました。今までは何の知識もなく外見で避けていましたが、その壁を今日の講演でつぶしていただけた気がしました。</p>
13	<p>・胎児性水俣病患者のことをよく知らなかった。全部話し内容が聞けて、新聞も読み、字も書けるといふ事実を知らなかったのは恥ずかしかった。半永一光さんの姿を見て認識を新たにできた。</p> <p>・水俣病のことをジャーナリストが伝えてくれているが、私はよく知っていなかった。一般人にもこれから、追跡したニュースを作って伝えていって欲しい。</p>
14	<p>「水俣病」の歴史についての映像であると同時に、それに関わった方々の人生をも見せていただいて自分の人生や生き方をふりかえらざるをえない場でした。</p> <p>登壇者の方々も、弱い部分をさらけだして、ゆれながら、今の場に出てこられているところに共感でき、考えさせられました。</p> <p>大変感じ、ゆさぶられることがあるセミナーでした。</p> <p>ありがとうございました。</p>
15	<p>水俣病患者に対する認識を大きく変えなければならないと感じた。今まで水俣病と言えば教科書などでしか目にせず、どこか昔の話のように思っていた。</p> <p>しかし、今でも水俣病の患者達は自分達の存在を訴え続けており、それは現代の人たちに、水俣病から学ばなければならない、そしてそれを今後の人生に生かして欲しいというメッセージが込められているように感じた。今日実際に半永さんとお会いして、上手く表現は出来ないにしても、考え方や意志は人並以上にしっかりしていて驚きだった。そこから自分の認識が間違っていたことを反省した。これから私が考えなければならないことは、水俣病患者の存在、水俣病患者とはどういう人達か、そこから何を学びどう生かしていくのかの3つではないかと思う。</p>

2) SNS メディアでのコメント

1	<p>水俣・福岡展協賛企画 映像セミナー「水俣から人間環境の未来を学ぶ」in 九州大学に来ています。出足が遅くなりましたが、素晴らしいセミナーに心洗われています。まだまだ16時45分まで解散されていますので、是非箱崎九大前より文系キャンパス中講堂にお越し下さい。</p>
2	<p>昨日、水俣・福岡展の協賛企画としての九大での映像セミナーに一部参加しました。何にも知らないことだらけでした。</p> <p>水俣病事件終わったことではなく、未だに苦しんでいる人ももちろんいるし、被害者と周囲との関係が時間の経過とともに悪化したり、理解しあっていたり、単純にチツソの流した有機水銀で患者が苦しんでいるということではありませんでした。</p> <p>とても簡単に説明できませんが、水俣で起こった様々な悲劇を検証していくことで今後起こりうるこのようなことの対応の指針になるのではないかと受け止めています。</p>
3	<p>水俣 福岡展企画 映像セミナー「水俣病を撮る」すばらしすぎる内容でした。</p> <p>ああ、ここまでの講演内容はなかなかないのでは。</p> <p>ドキュメンタリー作家の、村上雅道さん、吉崎健さんがそれぞれ原田正純先生にまつわる話の中で、「医学においても、ジャーナリズムにおいても、中立ということはありません。」そのことを深く教えられた、と仰っていたことが胸に響きました。</p> <p>ほんとに。今、そのことが市民の一人ひとりに問われているのだと思います。</p> <p>永野三智さんの渾身のお話も、体をつらぬく。</p> <p>人生をかけて伝えてくれる、一人ひとりの方に、本当に感謝します。</p> <p>飯島先生、お疲れさまでした！ありがとうございました！</p>

3) 岡幸恵の授業履修者から寄せられたコメント

1	<p>「水俣から人間環境の未来を学ぶ」を通して <u>水俣病の問題</u></p> <p>原田正純先生は「痛み苦しみを聞いてくれる相手を水俣病患者は求めている」とおっしゃった。原田先生を含めた水俣病の対策チームは当初、一軒一軒水俣病患者の自宅を回り、その際には差別を恐れて断られることも多かったそうだ。この「差別」は水俣病の大きな問題のひとつであろう。ゲストの水俣病センター相思社の永野さん体験として語られていたことが印象的だった。永野さんは水俣病患者(名前は失念)がおり、幼いころよく自宅に訪れ遊んでもらっていたそうだ。家に水俣病患者がよく来ている、このことを小学校にあがると友人らからバカにされるようになったという。友人と下校中にこの水俣病患者とすれ違った場面である。友人がこの患者の歩き方を面白がるようにまねていて、永野さんはこの時友人に合わせて真似をするか、もしくは友人を注意するのかという大きな選択を迫られたそうだ。永野さんは、友人に合わせて真似をする選択をして、それを見た患者さんはその場で泣き崩れてしまい、その光景が永野さんは忘れられないそうである。この</p>
---	--

	<p>「水俣病の差別」は水俣病が発生した 1950 年代からおよそ 40 年経ってもなお (永野さんは 20 代後半ということで) 色濃く残っていることがこの話から伺える。水俣病患者が苦しんでいるのは病気の症状だけではない、生きていくそれだけで周囲からの様々な圧力に苦しめられているのかもしれない。そのような多くの苦しみを抱えた患者さんにとって、痛み苦しみを聞いてくれる原田先生の存在の大きさを感じた。</p> <p><u>“病気”という位置づけ</u></p> <p>映像の中で、原田先生は「水俣“病”として、“病気”と位置付けているのには抵抗があった」とおっしゃっていた。これは、チツソの垂れ流した有機水銀が魚などの食物を通して人間の体内に入って引き起こされた症状なのだから、病気というよりもむしろ、傷害や殺人と同じだということである。この言葉には、私自身強いショックを受けた。“病気”というのは身体に“異常”が生じた状態であるが、原因がヒトが生み出したものと明らかにわかっており、病になったというよりはむしろ他人から傷つけられた状態であるという表現の方が適切である水俣で被害を受けた方々を“異常”であると認めていることになるからだ。このような“異常”な認知を当たり前のものとしている自分自身の認識のなさにショックを受けたのである。先述した内容と重なってくるが、差別的なラベリングはこうした無意識下にも行われているのだということを感じた経験となった。</p>
2	<p>水俣だけではない、福島だけでもない 映像セミナー「水俣から人間環境の未来を学ぶ」に参加して</p> <p>2011 年 3 月に起こった福島原発事故は今でも多くの日本人が記憶している事だろう。多くの人が住まいを追いやられ、仮設住宅での生活や他県での生活を今でも強いられている。そこに対して決して少ないとはいえない日本人が行動を起こしてきた。反原発を訴えるデモ、避難者への支援、反原発映画などなど。数を挙げればきりが無い。賛否両論ある活動だが、意味がない・影響がないとは言い切れない。実際にその事故を受けて人々が動いている様子はその事故の影響力を物語っていると言えるだろうから。</p> <p>水俣病という「事故」はどうだろうか。その「事故」はもう終わったものだと感じている人が意外と多いのではないだろうか。水俣病患者はもう生きていないかのような、遠い昔のような印象を受けていたのは私だけだろうか。映像の中にいらした原田医師の話を受けて言葉を選ぶのなら、「水俣病事故」なのだと私は感じた。自然環境で患うことのない病を生み出したという事故なのではないかと。この「事故」が起こったのは戦後のことであるのに、私には原爆投下よりも薄い記憶であった。原爆による被爆者も少なくなっているが、まだ最近のことだと感じているのに、「水俣病事故」はもっと昔のような気がしてしまう。それは単なる興味関心の問題だろうか。個人の関心の有無だろうか。</p> <p>原爆による被害に関しては、毎年夏になるとまるで儀式かのように特別番組が制作され、メディアでは式典を取り上げ、国内のトップニュースとして扱われる。数は少なくないが、季節報道として残っている。しかし「水俣病事故」についての報道はどうだろうか。原爆での被爆者の扱われ方はどこを見ても一様である。「戦争による犠牲者だ」アメリ</p>

	<p>リカによって落とされた原子爆弾が一般市民を苦しめているという大きな構造の中で成り立っている。その中に、被害者と加害者を明確に区分し、扱っているのではないだろうか。国内にいるのは被害者のみ。それが報道を容易にしていると感じる。それでは「水俣病事故」はどうだろう。日本人が豊かになるための高度経済成長においてチツソが排出した水銀まじりの水。それが結果的に水俣病という病気を生み出す「事故」につながった。国内に加害者と被害者が混在している状況。ここで中立を図ろうとしたマスコミは報道に慎重になっていないだろうか。原田医師は語った。「真の中立とは圧倒的弱者の味方になることだ」と。</p> <p>福島だけではない。水俣だけではない。広島、長崎だけではない。四日市も、新潟も、富山もまだまだあるはずだ。平和に見える日本だからこそ、このような問題が山積みになっているように見えるのではないだろうか。この山積みになっている問題を私たちがどう見つめ、どう介入していくのかという事がこれから期待される事項なのではないだろうか。</p> <p>学生はなぜ無関心なのか。学生こそもっとも興味を持つべきではないのだろうか。私たち学生という特殊なモノについても考える機会であった。</p>
3	<p style="text-align: center;">水俣フォーラムの感想</p> <p>5月12日に箱崎キャンパスにて水俣フォーラムが行われた。私は午前中の第一部に参加したので、その簡単な感想をまとめていく。</p> <p>本フォーラムの中では、水俣病に苦しんだ水俣病市民について、ただ病気の一面ではなく、水俣社会における様々な構成要素から話がなされた。私の中で最も衝撃的だったのは、水俣病に対する市民の意見が一様ではなかったという事だ。私達の世代において、水俣病というものは、四代公害病として教科書の中でのみお目にかかるものだ。ゆえに、その問題について説明を求められると、「工場排水によって海が水銀に汚染された、そこで取れる魚を食した人々が水俣病にかかり、その認定患者問題が現在も続いている。」という程度の説明にとどまる。そして、私達はその説明が不十分であるという事をほとんど認識していない。</p> <p>しかし、水俣病に対する認識や理解度は、本フォーラムを通して大きく進展したように感じる。これまで、水俣病において「水俣病にかかっていない市民」に着目したことはなかったが、その着眼点がこの問題に対する理解を生むということを実感した。私のこれまでの認識では、水俣の市民はみな水俣病の恐怖におびえながらも、この問題を起こしたチツソと戦ったのだらうと思っていた。それはおそらく私だけではなく、私と同年代の若者の認識はほとんど私と同じなのではないだろうか。しかし、現実には水俣病にかかってしまうことを訴えるのではなく、逆に家族から患者が出ればそれを隠し、時として、その患者をも恨むという現状があった。それには、チツソという会社が水俣の誇りであったこと、家族から患者を出すことで差別の対象となることなど、様々な要因が折り重なった結果であった。</p> <p>今日、それらの内容が私たちの下に広く伝えられる機会は少ない。先にも述べたとおり、私たちが知るのには認定患者の問題くらいだ。しかし、発生から約50年たった今でも、そ</p>

	<p>の時市民の間にできた溝が完全に埋まったわけではなく、また自分、また家族が水俣病であることを打ち明けられずにいる現状というのは、その解決に向かう難しさと、またその解決はどのような形で行われることが最もよいという理想像が描き切れていない現状だ。様々な対立があったように、この解決がどのような方向に進むことが望ましいのかを決めてしまうことはできないのだ。</p> <p>しかし、私たち若者世代にこのような現状を正しく伝えていくことを絶やしてはならない。ある意味、人間の根源的な部分があらわになった事件だからこそ、一見平和に見える社会に生きる私たちは知っておく必要があるのではないだろうか。</p>
4	<p style="text-align: center;">市民と水俣病</p> <p>水俣病、と聞いたときに私たちは教科書で習った過去の出来事であるという認識を覚える。既に過ぎ去った出来事であり、それがどのような影響をもたらしたとて、まるで今現在の人々には影響がないのではないかという甘い認識だ。私は今回、この水俣病のお話を聞いたことでこの自らの認識が大変恥ずかしいものであると実感したと同時に、改めねばならないと強く感じた。</p> <p>例えば私が水俣病で感じていた勘違いのひとつに、公害の原因となっていた化学工業会社『チツ』は私は水俣では当時からまるで悪党かのごとく扱われているものであると思っていたのだが、それは全くの間違いであり、水俣を大きく支える会社であった『チツ』はそこに入ることがステータスであり、登壇者の言葉を引用して説明するならば「合コンするならチツの男の人としたかった」と言われる存在であったという。だからこそ当時、問題が発覚した後もその羨望のイメージからには信じられないと思われていたというのだ。そして現在も『チツ』は経営を続けており、静かに賠償金を払いながらも経営を続けている。調べてみれば、この『チツ』を母体会社として、私たちの知っている有名な会社『旭化成』、『積水ハウス』などは存在しているという。どれだけ権威があり、大きな会社であったかを物語るひとつのエピソードともいえる。</p> <p>そのことを思えば、水俣病を引き起こした会社がそのように居るのだから水俣病は終焉したと感じられるかもしれない。しかしそれは全くの間違いであり、水俣病は終焉していない。むしろ、終焉しないものであると私は感じた。</p> <p>水俣病の後遺症で現在も苦しんでいる人々は多く存在する。またそれはただ症状が出るだけでなく、自らが認定患者であることを子供にまで隠し通し、その最後に自殺してしまう患者もいることを知った。水俣病は、その風評被害から他地域との溝を作るだけでなく、家族のなかにまで大きな溝を生み出すものであった、そして今もあるのだ。水俣病は『ミナマタ』という名で、広く世界にも知らしめられた。被害者はひたすらに早くその風評被害が終わることを願ったが、裁判が2000年代になってからも行われていたことを鑑みれば、それだけに遅い結論を待たされてきたかがうかがえる。</p> <p>当時の政府、行政の発表でなんの異常もないという見解から始まった水俣病は、どれだけの罪なき人々が深く傷つけられたかをもっと報道されてしかるべきである。現在、患者</p>

	<p>の血を引いた方々、当時から住んでいた方々が今も行政、会社の姿勢を問いながら日々を見つめている。もう終わったのでしょうか、と決めつけながら危機を何も感じていない私たちにその認識の間違いを今も問うてくれている。私たちはそれでもなお、何も考えずに水俣の市民をみつめられるだろうか。</p>
5	<p style="text-align: center;">水俣フォーラムの感想</p> <p>私は、今回の水俣フォーラムで原田正純先生の映像をその後のトークを聴講しました。私自身が北九州市出身ということもあり、公害問題についてはこれまで学校でも詳しく学んできたので、水俣病に関する知識もある程度は持っている方だと思っていました。しかし、今回 ETV 特集の映像を見て、まだまだ水俣病について知らないことが沢山あるのだと気がつかされました。今回のフォーラムに参加したことで、水俣病の患者に寄り添い続けてきた原田先生のドキュメンタリーはもちろん、原田先生のご家族、親しい方々のお話から水俣病について新たな視点で考えることができました。水俣病を患った方々、そしてその家族、また原田先生のように水俣病と向き合い続けてきた人達。そこには、それぞれの視点から見た様々な想いと苦悩があるのだと感じた。</p> <p>今回のフォーラムに参加して、せっかく水俣病についてよく考える機会を与えてもらったのだから、この経験を無駄にしたいと強く感じました。私に今できることは何なのだろうかと考えた時に、私が思いついたのは石牟礼道子さんの水俣病に関する本を読んだり、水俣・福岡展に行ったりしてより深く水俣病について考える時間を持つということでした。そして、その後自分が感じたこと、知ったことを家族や身近な友達に共有することができたらいいなと考えています。</p> <p>フォーラムで見せていただいた原田正純先生の映像の中には、深く考えさせられる言葉が多く出てきました。私は、中でも『被害があるところに差別があるのではない。差別があるところに被害があるのだ。』という原田先生の言葉が非常に印象に残りました。差別され、まつで人間ではないかのような扱いを受けてきた水俣病患者の方々はどうなにか辛く、やるせない思いを抱いてきたことが。私は想像するだけでも、本当にぞっとします。水俣病は、病気というよりも殺人であるのだということを原田先生はおっしゃっていましたが、本当にその通りだと感じました。水俣病は患者達の身体に重い障害を残しただけでなく、彼らが人間らしく生きていくためのあたりまえの権利までも奪ってしまったのだと思いました。そのような社会の中で、患者自身も水俣病が治らないということはよくわかっている。ただその苦しみを誰かに聞いて欲しいのだと言って、原田先生が水俣病の方の話に耳を傾けていた場面は本当に胸が痛くなりました。最近のニュースで、新たに水俣病に認定された患者さんの話が報道されています。水俣病に認定されたのはつい最近の話だとしても、その方が水俣病と闘ってきた歴史はとてつもなく長く苦しいものであったのだという事実を我々は忘れてはならないのだと思います。また、胎児性水俣病の問題等、まだまだ水俣病の認定されることもなく、うもれている被害者の方々が多くいるのだということはこれから先も早急に変化することではありません。今回フォーラムに参加して、水俣病は永遠に完</p>

	<p>結することのない問題であり、いつまでも忘れてはならない問題なのだと改めて感じました。水俣病問題のような大きな問題で、私一人が出来ることはあまりないかもしれませんが、せめて今回のフォーラムに参加して抱いた感情を忘れずに、何か少しでも出来ることを探して行動に移していきたいと思います。</p>
6	<p style="text-align: center;">水俣フォーラムの感想</p> <p>5月12日、私は水俣フォーラムに参加をさせていただいた。ビデオ鑑賞とトークを含む非常に密度の濃い1時間半のフォーラムを通して、私が心に思い浮かべたのは、「責任」という言葉である。</p> <p>水俣病という名の通り、熊本県の水俣で発生したこの病は、発生が確認されてから50年以上が経過している。言い訳に過ぎないが、そうした時間的な距離があり、わら氏は水俣病を遠い存在としていた。しかし、水俣病はここ九州で発生したものであり、今もなお苦しんでいる人々がいる。私にとって、水俣病は決して遠い存在ではなく、目を背けていいものではない。このフォーラムで、私はそのようなことを考えた。九州の最高学府で学ぶ者、いや、国からお金をもらってこの大学で学ばせてもらっている者としての責任を感じずにはいられなかった。聞くところによると、今回のフォーラム開催に尽力された飯嶋先生も、九州大学で教鞭をとる者としての「責任」から、水俣病に関わるようになった、という一面もあるそうだ。水俣病患者にだれよりも寄り添い続けた原田先生も自らの「責任」を自覚できるか否か、なのだと思う。そのことに気付き、責任を多少なりとも自覚できるようになったという意味で、今回のフォーラムに参加させていただけたことは、私にとって非常に有意義であったと思う。</p> <p>さて、もう一つ大切なのは、この「責任」を自覚したうえで、どのような行動を起こしていくか、ということだ。まずなにより大切なのは、月並みではあるが、「知ること」であろう。水俣病についてきちんと知ること。理解すること。これが大切だろう。今回のようなフォーラム参加も然りである。そしてその上で、「伝えていくこと」は一つの使命だと思う。</p> <p>「水俣病についてきちんとした知識を身に付ける。そして、それを他に伝えていく。」へついで表明をして、このレポートを締めくくりたい。</p>
7	<p style="text-align: center;">水俣フォーラムに参加しての感想</p> <p>私は第一部の「市民たちの水俣病」に参加しました。私の知らなかった事実が次々と出てきて、非常に驚いたというのが率直な感想です。登壇される方々は水俣病患者を支援してきた方々ばかりだと思っていたので、みなさんおお話の中で水俣病患者に対するマイナスなイメージを持っていたことなどが明かされて、とても衝撃を受けました。私は今まで水俣市の市民の方々は全員一丸となって水俣病患者の方を救うために、チッソや国とたたかってきたというイメージを持っていました。中学校や高校で公害について学ぶことは少しありましたが、ふかいところまで学ぶことはなく、四大公害のそれぞれの名前と地域ぐらいしか覚えていなかったもので、今日聞いたことのほとんどは今まで知らなかったことばかりでした。</p>

	<p>一番驚いたのは、水俣病をめぐって水俣市の市民の間でさまざまな対立や差別、争い、さらには家庭の崩壊があったということです。水俣病にかかってしまった人は、不可抗力で水俣病にかかってしまったのに、なぜ同じ市民からひどい仕打ちを受けなければならないのか最初は疑問でした。しかし、ビデオを見進め、村上さんのお話を聞いていくうちに、水俣病の患者に対立する市民の気持ちも少しわかってきました。村上さんは、水俣病の患者がチッソから補償金をむしりとっているようなイメージを持っていたとおっしゃっていました。それを聞いて、水俣にとってチッソという会社は必要不可欠な存在で、「チッソの崩壊 = 水俣の崩壊」というような危機感が市民の中に常にあったのだろうなと思いました。またそれと同時に、市民とチッソの間に依存関係が生じているようにも感じ、もし水俣にチッソ以外にも大きな会社や団体などの何らかの存在があれば、水俣事件は違った過程で結末を生んでいたのかなと思いました。チッソという存在に依存しすぎたがために、市民の間で価値観の違いや亀裂が生じてしまったのだと思います。地域における依存関係をもう一度問い直す必要があると思いました。</p> <p>そして永野さんが「安心して迷惑を掛け合える」社会づくりを目指しているとおっしゃっていましたが、これには非常に共感しました。今の社会では「自立すること」が重んじられているし、私もそのような考えを持っていた部分があると思い、自分の今までの考え方を少し省みました。「安心して迷惑を掛け合える」社会は心から信頼できる人が近くにいる社会だと思います。ただ迷惑をかけられるだけの関係ではなく、自己解決できる部分は自分で頑張るけど、失敗してもだれかがフォローしてくれたり助けてくれたりするという社会は理想的だなと思いました。これは水俣に限らず、どこの地域でも会座されていくべきだと思います。</p>
8	<p style="text-align: center;">水俣フォーラム 感想レポート</p> <p>水俣フォーラムで最も感じたこと。それは、「水俣病はまだ終わっていない」ということだ。もう工場からは水俣病の原因であるメチル水銀は使っていないし、水俣病に関するニュースも毎日取り上げられているという状況ではない。しかし、私は常に水俣病についての出来事の加害者とは誰なのか。水俣病の患者を社会の外に追い出したのは日本社会全体にあると思った。社会を構成しているすべての人々に責任がある。私は九州出身ではなく、熊本にはもちろん、水俣病の実情にあまりなじみがなかった。中学校の社会科の授業で少しだけ学んだだけであるが、今後はもっと関心をもたなければならないと改めて感じた。水俣フォーラムのなかでのキーワードは「人権」であったと思う。水俣病の裁判は簡単なものではなかった。裁判にはとても時間がかかる。何十年物期間がかかるため、裁判と戦っていた人は亡くなってしまい、自分の思いを伝えきれぬままになってしまっている。水俣病患者は他者から差別を受け、また、水俣市に住んでいるというだけで偏見をもたれる。そして、水俣住民は自分が水俣市の一員であることを他者に伝えることを隠してしまう。「社会に生きる」ということで最も大切なことは、自分の住んでいる町に適応し、誇りをもつことであると思う。そのようなことができるのが「人権」でもあると思うし、そうでなければなら</p>

	<p>ない。</p> <p>現在は、今回のような「水俣フォーラム」が開かれ、裁判も積極的に行われ、学校の授業で取り扱われるほど、水俣病に関して熱い動きがある。しかし、なぜ今のようなことが水俣病の当時にはできなかったのか。私はまだその答えを見つけることができていない。当時の社会をどのように説明することができるのか。当時の社会を乗り越えてくれた人がいるからこそ、今の自分自身の「人権」が尊重されていることを忘れることなく、考えていきたいと思っている。</p>
9	<p>水俣・福岡展協賛企画映像セミナー「水俣から人間環境の未来を学ぶ」in 九州大学</p> <p>私は今回のセミナーの午後のプログラムから参加させていただきました。水俣の問題について歴史的な事実としては知っていましたが水俣病患者がどのような差別を受けてきたのか、またどのようにその差別と闘ってきたかなど具体的な実情については恥ずかしがらまわたくと行っていいほど何も知りませんでした。世間では水俣の問題は過去の終わった出来事だと認識されがちですが、上映されたビデオのなかや登壇者のトークのなかは何度も「水俣の問題は終わっていない」とおっしゃっていました。私のように世間にはまだ水俣について事実としては知っているが実情を詳しく知らない人は多く存在すると思います。このような人たちにまだ水俣の問題は終わっていないということを知らせていくことが大切なのではないだろうかと考えました。</p> <p>「写真の中の水俣～胎児性水俣病患者・6000枚の軌跡～」や半永さんの話から、尊重されるべきは水俣病患者の意思であるのに世間の目や社会的または政治的事情によって彼らの意思が尊重されていないということを知りました。半永さんを含めた水俣病患者の方はみんなと同じようにしっかりと自分の意思をもっているにもかかわらず他人に伝えるのが困難なだけで、強い立場のものが彼らの意思を排除して自分たちの都合のいいようにしてしまうというのに強い抵抗感を感じました。特に上映された映像の中で水俣国際会議の日本語翻訳の中に“in harmonious”の訳である「協調」が入っていないという指摘があったように、一番強調されるべきものが主催者の意思によって排除されてしまいました。このように強い立場のものが弱い立場のものの意思を排除することについて強い違和感を感じました。</p> <p>そのことを踏まえたとき、「原田正純 水俣 未来への遺産」のなかで原田正純さんが「中立はありえない」とおっしゃっていたのが非常に印象に残りました。私はその言葉を「強い立場のものにとって中立はありえないものであるから何か問題が生じた際、強い立場のものが弱い立場のものの味方にならなければならない」と解釈しました。そのように解釈した場合、強い立場のものこそ弱い立場のものの意思を尊重し、両者の立場のものが共同していくことが大切なのではないかと感じました。</p> <p>今回セミナーに参加して、水俣病患者や同じような立場の方々に渡しは何かできるのだろうかと考えました。そのことを考えたときに渡しにはまだまだ知らないことが多くあるため、もっと学びを深める必要があると感じました。今後の学生生活や社会人生活を通し</p>

	<p>て、もっと学びを深め、彼らのために自分には何ができるのかを考えていきたいと思えます。今回のセミナーが参加していなかったら、私は水俣について詳しく知ることはなく、水俣の問題は終わったものだと認識していたままだったかもしれません。そんな私に自分には彼らのために何ができるのかについて考える機会を与えてくれた今回のセミナーはとても有意義なもので、このセミナーに参加してよかったです。</p>
10	<p style="text-align: center;">水俣フォーラムで感じたこと</p> <p>今回、私は5月12日に行われた水俣フォーラムのうち、第一部の講演に参加した。水俣病については学校の現代社会の授業で公害問題の一つとして教わった程度で、詳しい知識を持っていなかったため、フォーラムの内容についていけるかどうか不安であった。しかし、RKKが作成した「市民たちの水俣病」は水俣病について市民の側からあまり水俣病について知らない私たちも理解しやすい形で描かれていたので、この作品を見ただけでも水俣病について多くの知識を得ることができた。この作品を見ていて驚いたのは、水俣病やチツソをめぐって市民の人々が対立していたという事実である。私はてっきり水俣の人々は水俣病の被害を受けてチツソを憎んでいると考えていたので、水俣病の発生当時にチツソを養護する市民がいたということには大変驚いた。さらに、今もなおチツソは営業を続けていて、今でも「水俣の誇りである」という表現をトークゲストの永野さんからお聞きした時には、水俣病の問題の構造が思っていた以上に複雑であったことに気がついた。</p> <p>ビデオの視聴とトークを終えて、水俣病が発生してから今に至るまで水俣病市民の人々は水俣病に対して様々な思いを抱えて生きていることが分かった。そして水俣病という病が自分たちの生活に影響しはじめてから、それぞれ自分なりの方法で水俣病と向き合うことしてきたのだなと感じた。今回のフォーラムを通して私は問題と向き合うことはおれからの日本に求められていることなのではないかと思った。原発の問題も東日本大震災が起きてから大きく取り上げられるようになったし、人々も原発に対して意識し始め、学習するようになったが、このようになにか生活をおびやかす事態が発生してからでない私たちが行動を起こそうとしないのではないかと考えた。しかし今の日本人は行動を起こすまでに、事の重大さを知るまでに、時間がかかりすぎているのではないかと思う。権利の問題も同じであるが、身の周りで起こっていることを身近に感じることができず、自分の生活が脅かされていることさえも気づかずに生活しているのではないだろうかと思う。水俣病について学習していくなかで私たちは日々今に起きている、起ころうとしている問題を意識しつづけることを身につけていかなければならないと感じた。</p> <p>このフォーラムを通して水俣病をこれまでとは異なる角度から見ることで新たな発見がたくさんあった。特に水俣病の問題が起こってもチツソを養護し続けた市民の思いやその背景についてももっと詳しく知りたいと思った。また、今回のフォーラムに参加していた一般の方々それぞれの水俣病に対する思いや、フォーラム参加の動機も知りたいと思った。</p>
11	<p style="text-align: center;">「水俣から人間環境の未来を学ぶ」感想</p>

	<p>私は、午前の「市民たちの水俣病」上映とトーク「水俣病と市民」に参加しました。以下がその感想です。</p> <p>このイベントに参加して心に残ったことは、水俣病の捉え方が水俣市民とそれ以外の熊本県民で大きく違うことでした。特に熊本市出身の萬野さんが「水俣市民にもチッソにも良い印象がなかった」という言葉が印象に残りました。そこで、私は次の2つのことを思いました。まず、1つ目は、水俣市外の熊本県民のもつ水俣(病)への印象と、熊本県外の人がもつ水俣(病)への印象は異なっていたのだろうかということです。前者に関しては、県内では水俣市民を非難の対象として見ている、県外では「水俣市を含む熊本県民」として一緒に捉えられ、避難される側になることはなかったのだろうかと思いました。また、同じ県民というということで自身も水俣病になることへの危惧はどの程度あったのだろうかと思いました。それから、2つ目は、この感染の話に関係するのですが、鹿児島や宮崎の一部地域(水俣市周辺)の人がもつ水俣(病)への印象はどうだったのだろうかということです。地図(*)で見ると、水俣市は、熊本市よりも鹿児島や宮崎の一部地域に近いことが分かります。こうした人々にとって、自身も水俣病になることへの危惧はどの程度だったのか、またそれを危惧する人にとって、県境の存在はどのように捉えられていたのか気になりました。</p> <p>*ウェブサイト「熊本県 地図:マピオン [アドレス]http://www.mapion.co.jp/map/admi43.html (2013年5月14日閲覧)</p>
12	<p style="text-align: center;">講演会を聞いて</p> <p>私は2部目の講演を聞いた。講演内容は20年ほど前にNHKで特集された水俣病患者のドキュメンタリーの視聴と、その番組のディレクターだった方、出演者の方のコメントという形だった。まず、水俣病に関してだが、患者の症状やそれをとりまく環境など知らないことばかりで驚いた。そして、ハンセン病の問題と重なった。ハンセン病については私の出身である鹿児島にハンセン病患者のための療養所があるため知っていた。</p> <p>水俣病の問題は、日本人が人々の命、健康より経済発展を優先させていた問題と置き換えることができると思う。水銀を海へ放出したチッソは国の大事な化学会社だった。被害が確認されてからも国やチッソはなかなか動かなかった。国には、日本の一部で起きていることをいいことに被害者の健康をないがしろにした責任を問えると考え、国の利益を優先して一部の人間が苦しい思いをしていいはずはない。また、水俣病は被害を受けた人だけでなくその家族やコミュニティ全体を壊した。憲法第25条では「すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と記してある。水俣の人々が当時、この権利を保障されていたとは思えない。また国民の中には「水俣病じゃない人がお金ほしさに水俣病と言っている」と考える人もいた。このような世間の目は水俣病の実態が世間に知られていなかったことを示している。</p> <p>私たちは水俣病の教訓として産業と人々との協調を考えなければならない。そもそも産業の発展は人々の暮らしをより快適にすることにある。一部の人間の健康を害してまで産</p>

	<p>業を発展させることは望ましくない。産業と人は常に産業<人間の関係を保たなければならないのだ。</p> <p>授業で「権利」について考えたコマがあった。今回、水俣病について学んで考えた事は、権利を意識するのは権利を侵されている時であり、権利が意識されない時が社会はよい状態なのではないかということだ。日頃あたりまえの権利を侵されたときに人々はその存在に気づき、権利を主張する。近頃、学ぶ権利や選挙権などの放棄が問題になっているが権利を意識しない状態がそれほど問題なことなのだろうか。それより、教育や選挙におもしろみがない方が問題だと考える。</p>
13	<p>水俣・福岡展協賛企画映像セミナー「水俣から人間環境の未来を学ぶ」in 九州大学 今回のセミナーで一番強く思ったことは、水俣病がまだ解決した問題ではないこと、私たちがしなければならないことがまだまだたくさんあるということです。私は公害病という言葉から、高度経済成長期の病気というイメージしか持っておらず、過去のことであり、あとは保障をどうするかの問題だと思っていました。今も苦しんでいる人がいつということは何となく知りながらも、それ以上のことを知ることを放棄して避けてきたと思います。映像の中で、半永さんたちが「知ってほしい」と言われている姿を見て、自分が知らないでいること・知ろうとしないでいることが、どれほど患者さんの苦しみと向き合わないことになるか、放置することに荷担しているか、改めて気付かされました。</p> <p>このように基礎的なことを学んでいないまま参加したため、セミナーでは知らなかったことが多々ありました。患者と患者でない市民の間の溝、チッソに対して水俣の人たちが抱いている複雑な感情、患者とその家族の葛藤や社会的な苦しみ、チッソだけでなく行政がいかに水俣病に蓋をして隠そうとしてきたか。そして、前回の授業で先生がおっしゃっていた、同じようなことが今、福島で起きているということ思い出しました。原発も地方の経済的な発展に寄与した面があるとされ、いろいろな人の利害関係が絡んでいます。国はまた徐々に脱原発から方向転換をしています。経済的な発展が大事でないと言うつもりはありませんが、映像やセミナーで多くの方が言われていたように、経済発展ばかりを重視した結果起こった事件で、一番の被害を受けるのは責任のない弱い立場の人です。もうそれは嫌というほど分かっているはずなのに、自分を含めて多くお人はすぐにそのことを忘れて見落としてしまいがちです。忘れて見落としたりして同じ過ちを繰り返さないために、人は歴史を学ぶのだと改めて思いました。過去に起こった出来事も、それをなぜ今学ぶのか、今の社会や自分の生活にどうつながっていることなのかを考えながら学ぶことが歴史を学ぶことの大きな意義なのではないかと思えます。</p> <p>「中立」に対する原田正純さんの考え方も、とても印象深いお話でした。個人的なことになりますが、私が公務員を目指そうと思ったのは、社会的に弱い立場にある人の生活基盤を制度の面から直接的に支えられる仕事に就きたいと考えたからです。行政の仕事は中立である必要があります。でも「形式的な中立がいつも本当の意味での中立であるとは限らない」ということも、同時に気をつけておく必要があることだと思いました。</p>

	<p>今回のセミナーでは、ずっと向き合うことを避けてきた水俣病に出会うきっかけ、また自分自身を見つめる大切な時間をいただきました。まだ知らないたくさんの方についても見ないふりをせず知って考えていかなければならないと思います。参加できて本当に良かったです。ありがとうございました。</p>
14	<p style="text-align: center;">水俣フォーラムを通して</p> <p>今回の水俣フォーラムに参加する前に、「水俣病って知っていますか？」と聞かれたら、私は絶対知らないと答えてしまうだろう。もちろん今もよく知っているわけではないが、しかし、もう少し関心を持ち、知りたくなった。水俣病とは、よく知られているように、日本の化学工業会社であるチッソが海に流した廃液により引き起こされた公害病である。今回の水俣フォーラムをきっかけに、水俣病について、もう少し調べてみた。</p> <p>水俣病は、チッソ工場の排水にあったメチル水銀が、海にいる魚や貝などに入って、それを人が食べることによって起こる。空気を通じてうつることも、触ってうつることはない。体の中に入ったメチル水銀は、主に脳や神経を侵し、手足のしびれ、ふるえ、脱力、耳鳴り、見える範囲が狭くなる、耳が聞こえにくい、言葉がはっきりしない、動きがぎこちなくなる、などの症状が起こる。汚染された魚を食べた母親の胎内でメチル水銀が体に入って、魚を食べていないのに水俣病になった赤ちゃんもいる。水俣病で苦しんでいる人は今もたくさんいるが、今は海がきれいになったので、新たに水俣病になる人はいない。今回、私が参加したのは、二番目のプログラムだった。「写真の中の水俣」という番組を放映した後、番組の制作者と半永さんの話を聞く「トーク」の時間があつた。半永一光さんは、生まれたときから、水俣病になって、言わば、胎児性患者でした。自由に動けないばかりではなく、話すこともできないので、コミュニケーションが難しい状態だった。しかし、意識ははっきりとされているので、相手が質問をすると、簡単な「うん」とか「あ」とかの声を出して答えることはできた。なので、このように、質問を誘導する風なコミュニケーションは取っていた。半永さんは写真撮るのが好きで、写真展をするのが夢だった。しかし、写真展の開催することまで、いろいろな難しさがあつた。それは、行政的な難しさもあり、親族からの反対もあつた。親族からの反対がとて印象に残つた。というのは、単純になんで半永さんの家族さえも、半永さんの心をつかろうとしないのかの非難ではなく、ではなく、ご家族方の心も何か理解できたからである。社会からの偏見が半永さんだけではなく、ご家族の方々にも影響を及ぼしたからだろう。正直に言うと、この前まで、自分も少し偏見を持っていた。私が言っていることをたぶん分かってくれないだろう。自分が水俣について知るとしても、できるのは何もないだろう。という偏見だった。そういう偏見を崩してくれたのは、写真展を開催しようという半永さんたちの目的だった。「自分たちのことをしてほしい」という坂本さんの話が印象的だった。伝えられないので、はっきり自分の存在を知らせないが、写真展という形で知らせたかった。</p> <p>20年後の半永さんの姿を見て、思い出したのは人の強さだった。社会からの偏見のなかで、また長い時間一番近い親族から隠されたが、相変わらず人と交流したい、自分たち</p>

	<p>のことを伝えたいということに感心した。外の目から見るときに、半永さんは世話をしなければならぬ存在であるかもしれないが、今回を通して、逆に健全の私たちに貴重な学びを与えてくれたと感じた。</p>
15	<p style="text-align: center;">水俣フォーラムに参加して</p> <p>私は今回、第一部の「市民たちの水俣病」上映とトークに参加しました。その中で最も印象深かったことは、私自身が水俣病やその経過について、いかに一面的な視点をもってしか見ていなかったか、ということです。漠然としたイメージとして、被害者である水俣市民が、チッソと国に対して一丸となって戦ってきたというものを抱いていました。けれどチッソで働いている人々もまた水俣市民であるし、また被害者の家族であっても、その事実を隠してしまうといったように、本当に様々な立場、そして感情や思いが混じり合ったものであったということを知りました。また、チッソは水俣病の悪者のように考えてしまうところが私にはあるのですが、そんなチッソという会社も、水俣市民の方々の誇りであり、目標である存在であったことを初めて知りました。そんな、市民にとって偉大な存在であるチッソが起こしてしまった問題だったからこそ、その会社を擁護しようとする立場が多くあったり、人々の中で葛藤が生まれたりしたのだらうと感じました。私を含めきっと多くの方は、水俣病を市民、チッソ、行政というざっくりとしたくりしか見ていなかったと思います。けれども今回のビデオやトークを通して、その水俣病という歴史の中には、もっと細かい一人ひとりの立場や考えが存在していて、蠢き合っていて、それがまた歴史の流れをつくっているのだと思いました。永野さんのおっしゃった「マイクを向けた人だけでなく、それぞれの人に水俣病がある。」という言葉に、そのことが象徴されているように感じました。</p> <p>もう一つ印象的だったものがあります。それは、番組の中に出てきた方がおっしゃっていた「被害者意識はなかった」という言葉です。水俣に住む人でさえ、自分自身に何も変化がなければ被害者意識はなく、自分の生活にふりかかってくるときに初めて自分の問題として意識したといえます。この話を聞いていて、いつかの授業でディスカッションをした権利の話に通ずるものを感じました。当事者意識というのは、感じる必要の有無は別に、自分自身になにか問題や支障が振りかかってやっと感じられるものなのだというのを感じました。人間というのはきっとそういうものなのだろうなと思いました。それから、水俣の人は水俣病のことに無関心を装ったり、過去のことにしてしまったりしていたそうです。それだけ葛藤があったり苦しみがあったりしたということなのだと思いますが、人として、どうすればわからない最終手段として、そのような無関心や目を背けるという行動があるのだらうということを感じました。</p> <p>今回のフォーラムでは以上に述べたように、水俣病という一つの歴史の中に存在するひとつひとつの小さな動き、また「人」というものを強く感じたように思います。</p>
16	<p>「水俣から人間環境の未来を学ぶ」in 九州大学 第一部「市民たちの水俣病」上映、トーク「水俣病と市民」を聴講して 水俣病患者、それ以外の水俣市民、それぞれの葛藤に触れることのできる講演会内容</p>

でした。恥ずかしながら私は、これまで水俣病について原因が有機水銀であるということ、つまり教科書レベルの知識しか持ち合わせていませんでした。今回の講演会を受けて、水俣病が今なお患者を苦しませ続けていることに最も驚きました。水俣病は過去のもの、この認識を持っているのは決して私だけではないと思います。東日本大震災における原発事故からもわかるように、突然自分たちの生活が奪われるというのは、いつ誰に降り掛かるか分かりません。他人事に思っているままではいけない、またあらゆる立場から全体を検討しなければ全体を検討しなければその出来事の意味を理解できないとも思いました。今回のレポートでは特に印象深かったことを3つ取り上げ、考察したいと思います。

まず、当初水俣市では、ほとんどの市民が水俣病について無関心だった事実について。水俣病激発地を除き、ほとんどの市民は漁業の不振が顕在化して初めて水俣病発に対する危機感を覚えたと田上美孝さんは語っていました。これは単に水俣病発症者の住居が集中していたことだけが原因ではなく、漁業協会の固い口止めから惨状が知られていなかったことに大きく起因すると感じました。当初に植え付けられていた周囲のために口をつむる心理、水俣病であることや家族に患者を抱えていることに対するコンプレックスというのは後々まで影響したと思います。認定されると家族や周囲に迷惑がかかる、そんな気持ちが申請やその他行動に影響したとすると、その患者の葛藤というのは計り知れないと感じました。学校での水俣病教育についても、永野さんが学生だった時代は「よそからの差別に耐える強い心を持つ」という消極的な対応しか行っておらず、根本的な生徒の不安やコンプレックスを解消するものではなかった点も問題だと思います。そこに住んでいながら水俣病から逃げている、そんな市民の歴史を垣間見た気がしました。市民が一体となって国を相手取り訴訟を起こしたという印象が強かった私には、とても驚くべきことでした。

そこから発展して、2点目の水俣市民の中で対立が起こったことについても驚きでした。被害者側・加害者側と単純に定義することはできませんが、市民それぞれがさまざまな立場で対立や葛藤を抱えていたことが資料の中で挙げられていました。患者たちの座り込みに対する嫌がらせがあったという事実にはとても衝撃を受けました。市民同士だけでなく家族の不和も生じていたことから、水俣病についてどう捉えるかがとても重要な問題になっていたことが伺えます。市民間に生まれた隔たりを解消すべく、もやい取り戻し運動がおこったこともその重大さを示すひとつの指標だと思います。水俣病についての心の決着を付けないままずっと引きずってきた様子が伝わりました。もっと早い段階から市民が水俣病に真剣に目を向け、考える機会を充実させてくるべきだったのではないかと思います。経済効果ばかりを追い、水俣病を封印しようとしてきた歴史には反省すべき点があると思いますし、またこれを繰り返してはならないと認識しておく必要もあると思います。

最後に、水俣病の解決とは何かと考えました。現時点で、水俣病は終わっていないと思います。未だ水俣病センターが存在し、相談業務を行っているのです。このことをまず私

	<p>たちは知る必要があります。前述のように他人事ではないこと、繰り返してはならないことを学ぶべきです。この悲しい出来事から反省点を見だし、予防につなげることまでが私たちの義務だと思います。特に行政の立場にあれば尚更のことだと思います。経済面での決着は終焉を迎えていると思います。残りは当時を生きた世代、今を生きる世代が水俣病という事実に向き合うかだと思います。おそらく近年はそういった機会も多く設けられていると思います。最も問題なのは水俣病発生時の混乱期またはその直後に生き、そのとき植え付けられたコンプレックスを未だに抱えている市民がいるということです。これを解消するためには水俣病センターの役割も重要になってきますし、周囲の水俣病に対する理解というものも必要条件となります。本当に今も苦しんでいる人というのは、講演会やセミナーを開いても家から出てこないと私は思います。そうした市民をどうフォローしていくか、ここに対応策が求められると考えます。</p> <p>今回の講演会では予定のため第一部しか参加できずとても残念でした。私自身、水俣病に対してまだまだ無知であり、これを機会に今後見識を深めていきたいと思っています。貴重な機会をいただき、どうもありがとうございました。</p>
17	<p style="text-align: center;">5月12日水俣フォーラムに参加して</p> <p>半永一光さんの手にはいつもカメラがある。子どもの頃は、撮られてばかりだったという半永さんが初めてカメラを手にしたのは17歳の頃だそうだ。半永さんは胎児性水俣病患者の一人で、言葉を発することができない。しかし、理解しているのだ。わかっているのに、わかっているということを伝えられないだけなのだ。伝えたいことが思うように伝えられないという半永さんにとって、カメラを手にして写真を撮るという行為は、おそらくかけがいのない表現方法の一つになっていったのだと思う。半永さんがファインダーを通して映し出した水俣の風景の数々は、どれもとても力強い。しかし、数々の写真が映しているのは、それだけではない。番組の制作を手がけた吉崎さんがおっしゃっていたように「半永さんは生きている証として、自分の存在の証として、写真を撮っている」のだ。</p> <p>「存在の証」として写真を撮る意味。涙をこらえながら、吉崎さんが言葉にしてくださったその事実はとてもつらいものだった。水俣病の患者さんたちは、地域からも、さらには親族からもその存在を隠そうとされてきたのだ。半永さんが40年以上暮らしてきている明水園も少し外れた土地にある。番組の中で出てきた「水俣国際会議」で、患者さんが登壇して発言する機会がなかったことが指摘されている場面もあった。その対応は「水俣国際会議」と言いながら、都合の悪いところは見せずに、あるいは現実に向き合うことすらせずに、水俣病がさも解決したかのように対外的なアピールだけが先走ってしまっていたことをよくあわらしていた。当事者たちの苦しみも、想いも全て置いてけぼりだ。そこにも、半永さんたちをはじめとする患者さんたちの存在に対する「態度」の問題が見えてくる。</p> <p>一方で、半永さんを慕う人たちと半永さんとの絆や信頼も感じとることができた。番組制作を手がけた吉崎さんも、その一人で、きっと半永さんの喜びも悲しみも不安も期待も、自分のことのように背負うことができる彼だったからこそ、このようなドキュメントができたのだ</p>

	<p>ろうなと思った。途中で登壇された、半永さんの少年時代を知る女性がおっしゃっていた「半永くんは話す言葉は持っていないけれど、他の人が持っていない言葉をたくさん持っている」という言葉も印象的だった。補助の小田さんの愛情あふれる言葉も、それに反応した半永さんの笑顔も見ていてなんだかうれしくなった。互いに尊敬し合う気持ち、認め合う気持ちがそこにはある。このように、半永さんを取りまく人たちの、それぞれの距離感(近いものも遠いものも含めて)を、映像の中からも感じ取れた気がした。</p> <p>たしかに、正直にいうと私も半永さんを前にして、はじめはどう振る舞うのが正しいのかと少し悩んでしまった。でもよくよく考えてみれば、人と人との関わり方においてははじめから正解などないわけで、ともに過ごす時間の中で互いを少しずつすり合わせていくものだ。そしてこの世界に同じ人間などいないのだから、本来人間はきっと完全には分かり合えないだろう。だからこそ、分かり合えないところをいかに理解し合おうかと互いに試行錯誤していき、そして互いの存在に敬意を抱く。それが人と人が関わりあうことの本質ではないだろうか。何を迷っていたのだろうかと思う。半永さんが登壇された短い間にも、言葉ではない半永さんの喜び、悲しみの表現がだんだんと分かるようになっていった気がした。写真をこちらに向けて、ファインダー越しにみた私たちは半永さんの目にどのように映ただろう。不思議と半永さんにカメラを向けられていても、嫌な感じがしなかった。うまく説明できないが、それが半永さんと会場の参加者たちとの間で、一種のキャッチボールのように成立していらいからかもしれないと思った。</p> <p>この一連のプログラムを通して、私の中では水俣病の胎児性患者さんにお会いしたことよりも、半永一光さんという方に出会えたことのほうが大きな印象として残っている。しかし、同時に水俣病という人間の手で引き起こされた病、それによって生じた苦しみについて考えることは決してやめてはならない。きちんと知らねばならない。当時何が起こり、今何が続いているのかを。勝手に終わりにすることなどは決して許されないのだ。その意味で、自分はまだまだ無知であるし、実際に起こった現実を知ること、水俣で今生きている人、とくに患者さんに向き合うことのどちらもが大切だと思った。だとすると、歴史的事象としてはこれまでも学校で習ってきたが、その学びと同時に、「本当に歴史なのか、過去のものなのか」と考えることがまず必要であるだろうし、そのうえで、過去のことで決してないのだということを認識し実感することが欠けているのだと思う。幸いにして、私はそれを考える機会を得られたのでさらに知る努力をしたいし、同時に水俣病以外にも同じような状況にあるものがあるのではないかと考えると、「過去の出来事」として勝手に終わったことにされてしまったものがあるのかもしれないという視点そのものを、大切にしたいと思った。</p>
18	<p style="text-align: center;">原田正純さんの一生から感じたこと</p> <p>今回私は人権学習で名前だけ知っていた原田正純さんについて興味を持ち、映像セミナーに参加した。水俣病と向き合い続けて医学的にも功績を残したお医者さん、というような知識しかなかったが、今回のセミナーでは原田さんの一生からだけでなく登壇者の</p>

方からも想像以上の刺激を受けた。ここではその中から3つ取り上げて、原田さんの生き方から感じたこと、水俣病と差別について考えたこと、熊本県民として感じたことについて話したいと思う。

まず、原田正純さんの生き方、考え方からどのような刺激をうけたのかについて述べたい。私は医者としての原田さんの言動はいうまでもなく、人との向き合い方や原田さん自身の生き方に刺激を受けた。原田さんは、お互い同じ力関係なら中立はありえるが、差があれば大きい方に合わせることになることを指摘し、患者に寄り添う姿勢を見せていた。患者さんと接している様子からは、医者と患者の関係以上の信頼関係や親密さが伝わってきた。私にとって新しい考え方であった。中立というのは妥当であるように思えるが、背景には弱者の犠牲や妥協があるかもしれないことを考える必要があると思った。

そして原田さんは様々な考え方が異なる人たちと人々として向き合っていて、萬野さんによると、どんな価値観や宗教、イデオロギーであっても同じ人体として見ている点ではどこまでも医者であったということである。原田さんのもとに人が集まってくる理由がわかったような気がした。常に一対一の関係で偏見にあてはめたりせず受け入れ向き合ってくれる原田さんの周りの空気はとても居心地がいいものであったろう。

もう一つ印象に残っているのはジャーナリストとしての原田さんの一面である。原田さんは水俣病の症状だけをみるのではなく、その家族、地域で何がおこっているのかを何十年もかけて見続けた。水俣病を医学だけの問題に終わらせようとしなかった。水俣だけでなくブラジルやベトナムでも医療活動を行っている。水俣で起きた事件だけでなく世界で起きている都市化・工業化の弊害にも目を向けていたのだ。簡単なことではないと思う。多面的な見方とはこういうことを言うのではないかと思った。私はこのことを知って、どんな職業でも、誰でもみんなジャーナリストになりえるのではないかと思った。

次に水俣病と差別について考えたことを述べたい。私は熊本県出身なので小学校では水俣病についての人権教育があった。しかし恥ずかしながらあまり記憶がない。今回の上映会、登壇者のお話でその差別の実態を生々しく感じた。今までは水俣病は解決されたもののように感じていたが、認定を受けてない人の多さや、差別を恐れて水俣病であることを隠してきた人々の話、水俣病第一次訴訟で認定された患者の後に水俣病認定を受けた人々への怒り、永野さんが話してくれた自身の経験から、私はまだまだ続いていて解決されるべきことが残っていると感じた。特に永野さんの加賀田清子さんとのエピソードは印象的だった。私はそのような話をしてくれる人を初めて見た。自分が後悔している過去をさらけ出してくれた感じがした。その分永野さんのように後悔している自分のしてしまった過ちを人に伝えることはとても勇気がいるし、いままでの人権教育の中で一番ずっしりと心にのしかかった。いまだに水俣病に関する日本人の認識は浅く、差別に苦しむ人も多いだろう。「水俣病学」ではなくあえて「水俣学」という学問を立ち上げた意味には差別に苦しむ患者さんについて学ぶ意味もあるだろうと思った。「水俣学」にこめられた水俣病被害に携わる人々の考えの深さを感じる。

	<p>最後に熊本県民である私自身がかんじたことについて書きたい。私は熊本県民ではあるが、実は水俣にいったことがない。小学校でも水俣病について少ししか勉強していない。近くで起こっていることなのに今まで何のアクションも起こしたことがなかった。今回の上映会への参加が自ら水俣病に関わった最初の行動といえるかもしれない。そして、今回の経験は私に大きな影響を与えた。実際に水俣病と真剣に向き合ってきた人から話を聞いたのだが、熊本県民であるためかより身近に、よりリアルに感じた。映像で話される熊本弁がより私の問題なのだ、と感じさせた。私も水俣病に出会ったからには水俣のことを考え、学び、私と水俣とのつき合い方を考える責任がある。今回の上映会が終わって最初に思ったことは、「水俣・福岡展」にいかなきゃ、ということである。</p>
--	---

4) 飯嶋秀治に個人的に寄せられたコメント

1	<p>午後は仕事がありましたが、午前中のみ参加させていただきました。</p> <p>・「市民たちの水俣病」を観て、水俣病の全体的な経緯の一片に触れることができたように思います。</p> <p>「問題」というものが起こり、社会経済への影響から人々の間が変化してゆく立場・関係性の複雑さが生み出す混頓になんとも言えない思いがわいてきます。</p> <p>あらゆる「問題」のたどる経緯は、本質的に共通しているのではないかと思いました。</p> <p>何ができるのか、どうすればいいのか、まったくわかりませんが、ひとつずつ向き合っていければと思います。</p>
2	<p style="text-align: center;">130512 水俣学セミナー感想</p> <p>飯嶋さん、今日はお誘いありがとうございました。</p> <p>すごく良かったです。</p> <p>今までに参加したセミナーで 1 だったような気がします。(終わってすぐの感動のせいでしょうけど...)</p> <p>ざっくばらんに思ったことをお伝えしますが、「参加者アンケート」の扱いでも「私信」の扱いでも、どちらでも構いません。</p> <p>豪華な登壇者の方たちでしたね。</p> <p>映像の選択もとても良かったです。</p> <p>あれ？でも、感じたことを言葉にしようとする、あまりいい言葉が浮かんで来ない感じ</p> <p>です。</p> <p>それだけ感じたことが大きく、「言葉」が小さく感じるのかもしれませんが。</p> <p>水俣の現実を学べたというのはもちろんのことですが、今の自分の関心に引きつけて感じたことを述べると、次のあたりです。</p> <p>「原田先生は医者なのか、ジャーナリストなのか」という問いが出されたとき、僕の答えは「『人』なのでしょう」というものでした。</p> <p>でも、萬野さんのお答えは「どこまでも医者だった」というものでした。</p>

「人」が「人」に出会う、ということが、今日お話を聞きながらの僕のテーマでした。

医者専門性とは？ 臨床心理士の専門性とは？

クライアントの分からない専門家の言葉を上から振りかざして分かったような顔をするのが臨床心理士の専門性なのか？

いや、僕は精神医学的な見立てが弱いので、「医学の知識が臨床じゃない」と思いたいだけだ...

僕は普段からそんな葛藤を抱いていますし、今日話を聞きながらもそんなことを考えていました。

原田先生は、お名前を地で行く「正」で「純」な方ですね。

愚直に患者さんに向き合い、自身の信じる道を進む。「患者さんに伝わる言葉で」語る。

僕も、性格的にはそういうタイプです。(原田先生がどうかは分かりませんが、加えて僕は不器用です)

一人一人のクライアントさんに誠実に向き合い、お互いに分かる言語で対話し、その人が健康に生活できることを第一に考える。

それは、僕が心がけてやっていることです。

何だか、言葉にすると貧相。

だけど、現場でその生活人である対象者に「出会い」「接する」ことは、言葉(=理論)を超えるように思います。

つまり、「臨床」がもつ力は、それほど大きい。

だから、今日の登壇者の方たちの語りや映像は聴衆の胸を打つのだと思いました。

下記はちょっとつまらない話ですが、今日の登壇者の方たちは(僕ら臨床心理士や精神科医が言うところの)いわゆる臨床の専門家ではないでしょう。

でも、水俣の人たちにとってどれだけの力になっているか。

逆に、臨床心理学はそこまで役に立っているのか？

(もちろん、仕事をするフィールドが違うので、臨床心理士の仕事はこれでいいのでしょうか)

「人」が「人」に出会う、というテーマでもう一つ見ていたのは、飯嶋さんを含む登壇者の方たちのつながりについてです。これも素敵でした。

それこそ仕事上のつながりじゃなく、むしろ個人的な(生活者としての)つながりで今日のセミナーが実現したのでしょうか。

これは、臨床心理士が下手くそ、あるいは逆に理論的に避けているようなことです。

映像にあった、水俣で開かれた国際学会の翻訳されなかった副題の話かもしれません。

私たちの社会で、「人」と「人」は本当に出会っているのか？

医者は患者と、臨床心理士はクライアントと、文化人類学者は対象者と、本当に出会っ

ているのか？

今日の登壇者の方たちや原田先生は、お互いに、そして患者さんたちとしっかり「出会う」いたのだと思います。

飯嶋さんの適当な(すみません！)服装での司会ぶりも、語り口も、そのままの飯嶋さんと出会えた感が満載でした。その雰囲気も良く出ていて、司会も素敵でした。

もう一つ頭にあったのは「当事者」という言葉です。

これは宣伝ですが、6月1・2日に添付のセミナーが開かれます。

高松里先生主催、『「当事者性」を臨床／研究に生かす』というテーマです。

冬に行った同テーマのセミナーは相当面白かったです。

飯嶋さんにももしご関心とお暇があれば、ぜひご参加ください(多分、飲み会だけでもOK！)。

飯嶋さんにとっては学問的に物足りないかもしれませんが、臨床家の集まりなので、臨床的な視点は十分かと思います。

このセミナーでは、「当事者って誰？」というのも一つのテーマです。

今日の映像セミナーを聴いていて、この点も頭に浮かんできました。

水俣病であることを周囲には隠したい。

でも、信頼できる人にそれを言えたとき、胸のつかえがスッと下りる。

これは自助グループでよく起こる現象です。

地域社会やマスコミでは、集団力学も大いに作用していますね。

高松里さんがされているテーマですし、ベテルの家や発達障害の領域で「当事者研究」が最近話題になっています。

自分で自分のことを「研究」として語ることで、自身の理解が進み、他者にも自身のことを伝えられ、自身の癒しにもつながるといようなテーマです。

水俣の人たちのことは「当事者性」ということも考えさせられます。

飯嶋さんもこのテーマに関心おありかなと思い、「当事者セミナー」の宣伝をしました。

...だらだらと、きりがいいですね。すみません。

まとまりがないですが、ご容赦ください。

こういうときは、急いで言葉にしない方がいいと思うので、まとまりませんがここでやめます。

それくらい、心に響くセミナーでした。

今日の経験を温めておくことで、また何か気づきが出てくると思います。

飯嶋さんが企画する集中講義や授業にも聴講生としてお邪魔したい気になってきました。

また何か、僕の関心を引きそうなテーマのものがあれば、お声かけください。

今日はありがとうございました。

感謝します。

	板東充彦
3	<p>教育学部門の岡です。</p> <p>日曜、本当にいい会でしたね。</p> <p>学ばせていただくことが本当に多かったです。</p> <p>簡単にその一言におえてはいけませんが、充実感いっぱい、帰途につきました。</p> <p>私はどうしても社会教育の人間として「水俣にどう学ぶか」「どうシェアし次世代につなぐか」ということにも関心がいくのですが、その意味であの場はすごいと思いました。</p> <p>みなさん懺悔録的に、自分を問う発言に終始しておいででした。</p> <p>それが呼応しあってどんどん深みのある発言に向かっていくような。</p> <p>あれは若い世代にかならず響く質のものだったと思います。</p> <p>私と共に終日あの場にいた、社会人大学院生でフリーライター・地元学指導者の森千鶴子さんと一緒に、参加の予定です。</p>
22	<p>飯嶋先生へ</p> <p>この4月に、人間環境学府教育システム専攻で、社会教育研究室の岡幸江先生のところに、社会人枠で入学しました。森千鶴子と申します。以下、水俣シンポジウムの感想です。</p> <p>日曜日のシンポジウムは、水俣のいま、を知る上でとても有意義でした。私自身、水俣は、患者の保障の問題などまだまだあるけれど(その内容は知らず)再生へ向かって成功し、事態は収束しつつあると感じていたからです。</p> <p>今回3本のフィルムを見せていただき、パネラーの方々そして、飯嶋先生のお話を聞いて、私が、水俣に通い、学んでいた2004年～2006年頃は、水俣が環境都市としての再生の道を模索していた時代だったのかもしれないと感じました。それ以前の経過も、改めて再確認することができました。</p> <p>私は水俣で、元市役所職員、水俣病資料館長の吉本哲郎さんに、地元学のフィールドワークを学び実践してきました。(もう一人の師匠は東北の民俗研究家、結城登美雄さん)。自分が吉本さんと学んだ地元学が、地域再生へと踏み出す過程で生まれてはいたけれど、それらは、必ずしも水俣市内全域で活かされていたわけではないことも感じました。特に患者さんを多く出した地域よりも、地元学による地域の見つめ直しは、山間部において活発だったように思われます。しかし、その事実も重要なことで、患者のいない地域にとっても水俣病は大きな課題を残していたということも言えるかもしれません。</p> <p>私は、吉本哲郎さんとともに、相思社を訪れたり、唯一患者さんから話を聞いたのはいりこ漁をしておられた故杉本栄子さん(当時はまだまだお元気でした)で、一緒に会食をさせてもらったことがあります。しかしながら重度の患者の方の声や、また対立と自己のあり方に悩む市民の方の声を聞くのははじめてのことでした。</p> <p>吉本さん自身が、市役所の職員としては、水俣の負の部分ではなく、再生へと向かう部分を私たちに見せたかったのではないかと、そして他の地域の参考にしてみようことで、水</p>

侯の希望としたいという願いがあったのかもしれませんが、吉本さん自身、水侯市民として、語り尽くせないことがあったのではないかと感じました。

「本当につらいときにはな、笑うしかないんだ」

吉本さんは、よく、そういっておられました。そして、講演等で必ず紹介される言葉は、杉本さんの「いじめられても、いじめがえしはしない」と言う言葉や、「生きているうちに助けてくれ」という言葉でした。

水侯病の政治解決をした吉井正澄元水侯市長にもインタビューをしたことがあるのですが首長としての吉井さんのお話も示唆にとんでおりました。吉本哲郎さんの地元学を応援してくれた市長です。飯嶋先生は、お会いになったことがありますか？まだまだお元気なので、(水侯市久木野、愛林館の近くに在住)機会があればお話を聞きに行きましょう。教育行政についての独自の見解をお持ちの方だと思います。

半永さんの写真はすごかった。

私が一番泣いたのは、国際シンポジウムに来ていた学者さんたちが、半永さんに出会う場面。

一部を除き、半永さんに哀れみの目を向けていたように思ったことそれから、あの写真を撮られた環境大臣の顔…。彼らが悪いと言うことではなくて、人の心の中にはそういう気持ちがある。それが辛く悲しくなりました。

水侯事件はその縮図ですね。そして、それらは、いじめとか形を変えて私たちのすぐそばにもある。

自分の心の中にも。

ともあれ、私が盛んに水侯に通っていたのは2年ほどの間。そしてその後、飯嶋先生らが、水侯に関わられて、そしてその活動の中で、もう一度水侯に出会い直せたことを、意味のあることと受け止めました。

私は、水侯で学んだ地元学の手法を、これからも各地の人々のために、そして学生たちのために役立てたいと考えています。

そして、今、水侯で生まれた地元学は、水侯でどのようになっているのだろうと思いをめぐらせるようになりました。福岡・水侯展にも足を運ぼうと思います。

飯嶋先生が、現在水侯でされている活動にも大変興味を持っております。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。(飯嶋研究室の越智くんとも仲良しです)

人間環境学府教育システム専攻(社会教育学研究室所属)修士課程1年(1968年生)森千鶴子